

横光利一「無常の風」論

——天地人の文学

英 荘 園

一、

「無常の風」は、一九二五年（大正十四年）九月発行の『文藝春秋』第三年第九号に発表され、一九三一年（昭和六年）十一月、白水社刊行の『書方草紙』に収録された、横光利一の初期エッセイである。「無常の風」の冒頭は、次のように始まる〔1〕。

幼い頃、「無常の風が吹いて来ると人が死ぬ」と母は云つた。それから私は風が吹く度に無常の風ではないかと恐れ出した。私の家からは葬式が長い間出なかつた。それに、近頃になつて無常の風が私の家の中を吹き始めた。先づ、父が吹かれて死んだ。すると、母が死んだ。私は字が読める頃になると「無常」の風とは「無情」の風にちがひないと思ひ出した。所が「無情」は「無常」だと分かると、無常とは梵語で輪廻の意味だと云ふことも知り始めた。（中略）無常の風に吹きつけられると人の血管が破れるのにちがひないと思つた。

無常の風とは、元来、仏教由来〔2〕の、世の無常を「風」に比喻する概念である。横光は、この風を抽象的概念として理解せず、人の死と関連する物理的存在とした。横光は、身内に起こる凶事をこ

の風で解釈し、「無常の風に吹きつけられると人の血管が破れる」と思いこみ、さらに次のように論じている。

私は中学時代から地貌と云ふことに興味を持つてゐた。私は旅行をするといつてもその土地の岩質に眼をつけた。河原を歩いても砂礫の質の相違によつて河の支流の拡がりを感じるのが面白かつた。しかし今は地貌の隆起に心がひかれる。隆起の相違によつて気流に変化があるのは当然だからである。此の気流と生活と云ふことは余程親密な相関性を持つてゐる。殊に人間の運命とは特にいちじるしい関係があると私は思ふやうになつて来た。人間の意志は気流の為に屈折する。意志は直線形に進行する性情があるが、途中で方向を変化さすのは気流の力が多大である。この法則は私の独断だとは思はない。アメリカの或る地方では東風が吹くと殺人犯が激増するといふ。フエリオの犯罪学には殺人者が殺人をする際、気流の温度の相違によつて忽ち狂人に変化し、殺人が不可能となつて逃亡する実例を上げてある。

横光は、中学時代以来の、地貌に対する興味を端緒として、地形と意識をかかわらせ、無常の風を解釈しようとしていた。地貌が気

流を經由して人間の意識を支配するという観念は、風と血管の関連性と共通する所がある。地貌は、気流を形成することで、身体を通じて、意識を左右するという。横光は、この説を補強するため、「フェリオの犯罪学」における実例を援引している。「無常の風」では、無常の風と横光文学の関係は次のように示される。

私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を發展さす場合、いつも此の風と光線とが気にかかる。確に此の風と光線とは人間の意志と感情の発生及び發展に重大な必然的影響があると思ふ。

「無常の風」の結末において、横光は、「私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を發展さす場合、いつも此の風と光線とが気にかかる」と述べ、自らこの風を作品内に書き込んだことに言及している。本稿では無常の風を横光文学の要諦ととらえているが、従来の横光研究において、エッセイ「無常の風」は論じられていない。無常の風とは何か。それはどのように横光文学に反映されているのか。この二つの問いを解明することが、本稿の目的である。

二、

横光は、「無常の風」において、風と犯罪の因果関係を論証しようとして、「フェリオの犯罪学」に言及した。この思想の理論的根拠は、「フェリオの犯罪学」にあるようである。「フェリオ」とは、イタリアの犯罪学者、エンリコ・フェリー (Enrico Ferri) のことである。彼は一八五六年に生まれ、一九二九年に没する犯罪学者、政治家、社会主義者である。犯罪学の先駆者チェーザレ・ロンブ

ローゾに師事し、ボローニャ大学助教授、パレルモ大学教授、ローマ大学教授を歴任し、政治家としては、イタリア社会党の党首となる^③。

フェリーの著作「実証派犯罪学」^④によれば、犯罪学は、あらゆる自然科学と同様に、実証的に展開されるべきであり、犯罪についても、伝染病の救治と同様に、実験的方法によって自然現象として研究すべきだという。そして、フェリーは、当時主流であった古典派犯罪学に対して、その根本にある善悪の観念を攻撃した。古典派犯罪学は、犯罪の原因は犯人の罪悪にあるとするが、実証派犯罪学は、善悪の存在を否定し、犯罪を自然現象として理解する。フェリーの思想は、この対立にとどまらず、さらに本質的に思考し、対立の背後に存在する自由意志の問題に發展させる。フェリーは、「実証派犯罪学」において、次のように述べている。

古典派犯罪学者及び普通人の一般的意見は大体次の如くである。即ち犯罪は道德的罪を含んで居る、何故かなれば有徳の道を去り犯罪の道を選んだ所の個人の自由意志によるからである。故に其は相当した量の刑罰を課して圧迫さるべきである、と云ふにある。此れは今日までの犯罪の一般的概念である。而して自由人類意志——因果の永久的大洋中に於ける唯一の奇跡的活動者なる——は人が有徳か悪徳かを自由に選択し得る所の仮定に導くものである。近世心理学が実証的近世的調査の凡ての器械を固めて、自由意思のあると云ふことを否認し、人類の凡ての行為は人格と人の環境との協働の結果なると云ふことを主張して居る今日、諸君は自由意志の存在を尚ほ如何にして信じ得るか？ (中略)

凡ゆる物理現象は前以て決定された所の原因の必然的結果である。若し此等の原因が吾々に知られて居るならば、吾々は諸現象は必然的であり、宿命的であると確信する。又若し吾々が原因を知らないならば、吾々は其を突變的だと考へる。同じことが人間の現象に於ても真理である。然し吾々は多くの場合に於て、内的並に外的諸原因を知らないからして、吾々は其を自由現象であると主張する。即ち其はその原因によつて必要的に決定されたのではないと主張するのである。

古典派犯罪学は、人間が自由に行動できると信じ、犯罪者を処罰すべきと思惟する。実証派犯罪学者であるフェリーは、それに反して、犯罪者が「自ら欲して犯罪」することを認めず、犯罪を犯罪者の「内部的及び外部的原因結果の連鎖」の産物と考え、犯罪者本人が選択できるものではないと主張する。

フェリーは、すべての物理現象を「前以て決定された所の原因の必然的結果」と考へる。もし人間がすべての原因を理解できれば、諸現象は「必然的であり、宿命的である」ということを了解するだらう。しかし、人間は多くの場合、事象の因果関係を理解できない。従つて、それを自由現象と主張するしかない。

そして、フェリーは、犯罪の「自然的原因」を「人類的」、「地球的」、及び「社会的」という三要素に分類し、犯罪をこれらの要因の「相互作用の結果」とであると唱へた。

犯罪の「社会的要因」については、説明の必要はないだらう。犯罪の「人類的要因」については、フェリーは、「器官的及び解剖学的体質」に関するものと考え、「吾々は誰でも或る器官的及び心理学的結合を出生に於て遺伝し、一生涯の間に人格化する。此が人間

活動の個人的要因を作る」とし、人間の身体と器官の状態がその行動を支配することを主張する。横光が「無常の風」で言及する「フェリオの犯罪学」は、「実証派犯罪学」における「地球的要因」の部分である。

吾々は一般に自分が住んで居る所の物理的環境の諸状態を忘却して居る。(中略) 地球的環境は我々の生活的活動の上に、神経系統によつて、大なる影響を持つて居る。吾々は、南風或は北風の吹くのに従つて、異つた気風になる。ガリバルヂはパムパスの草原にあつた時、彼は、パムパス風が吹くときには、彼の友人等が腹立つて、激烈な口論をする癖があつたこと、及び此の風が止むと友人等の動作も変つたことを目撃した。犯罪統計学の大創設者なる、ケトラー (Quetel) 及びゲリー (Gerry) は、気候の変化は犯罪の変化と一緒に行はれて居ることを観察した。性的犯罪は春や夏に於けるよりも、冬に於ては少ない。且つ此の点に關して、私が嘗つても主張し、今尚ほ主張して居ることは、若し財産に対する犯罪が冬に於て増加するものならば、其は温度と社会状態との結合の結果に負ふものであると云ふことである。

フェリーは、人間が無意識のうちに、絶えず「神経系統」を通じて、周囲の環境に影響されることを力説し、「ガリバルヂ」のエピソードを挙げる。「パムパス」は、南米・アルゼンチンに位置する草原で、「パムパス風」が吹くと人は口論するといふ。横光は前引「無常の風」において、「アメリカの或る地方では東風が吹くと殺人犯が激増するといふ」と述べていた。「風」と犯罪の因果関係をめぐつて、横光が「実証派犯罪学」の「地球的要因」の部分参照し

たのは間違いないだろう。

ただし、「無常の風」の記述は、邦訳「フェリ氏実証派犯罪学」の記述と完全には一致しない。「実証派犯罪学」は、一九〇一年四月、フェリーがナポリ大学において行った三回の講義に基づく。一九一三年、Ernest Untermannによつて英訳され、一九二四年、教育社会学者浅野研真によつて英訳を重訳した邦文が『日本法政新誌』に連載された。「フェリ氏実証派犯罪学」における南米の「パムパスの草原」は、「無常の風」においては、「アメリカの或る地方」と曖昧化される。風と犯罪の因果関係をめぐつても、「フェリ氏実証派犯罪学」は「南風或は北風」とするが、「無常の風」では「東風」とする。横光は邦訳以外のテキストで読んでいたと推測される⁵⁰。

自由意志の否定を前提として、地球環境という物理構造は、「神経系統」を通じて、人の活動を支配することになる。「無常の風」は、続けて、日本の家相学もフェリーの犯罪学で解釈する。

私の家でも窓の相違で部屋の空気の中に一定の通路が生じ、通路を外れた箇所では碁を打つと後が長く続かずに直ぐ頭が疲れて来る。だが通路の中で碁を打つと客観性が無くなつて喧嘩甚ばかり打ち始める。その代りに頭がいつまでも続いて行く。家相学では家の東南に桃の木があると淫風が吹くと書いてあるが、淫風は風の吹く所には起らない風である。風の吹きまくる所で性慾は起りはしない。

横光は、家の構造を地形と照応させ、部屋に生じた空気の通路を、地形に屈折する気流と対置し、「空気」の通路によつて、人の行動も変化すると主張する。「通路の中で碁を打つと客観性が無くなつて喧嘩甚ばかり打ち始める」の件は、前引「実証派犯罪学」の

「ガリバルヂはパムパスの草原にあつた時、彼は、パムパス風が吹くときには、彼の友人等が腹立つて、激烈な口論をする癖があつた」という一文とよく符合していよう。家相学と淫風の関係も、前引「実証派犯罪学」の「性慾的犯罪は春や夏に於けるよりも、冬に於ては少ない」という一文とよく符合している。

「無常の風」発表の二ヶ月後、横光は「感想と風景」（『文芸時代』第二巻第十一号、一九二五年十一月）を発表した。「感想と風景」は、「無常の風」と同じく『書方草紙』に収録されたエッセイである。身辺事実に基づくこのエッセイにおいて、横光は、家相学の発想をさらに発展させている。

契約した瞬間、ふと、「さて此の家は？」と考へた。左様に考へたと云ふ気持の中には、家全体から受ける感じに、一点「いやだ、」と思ふ感じがあつた。どこか明るの中に不思議な暗さが何れともなく心に残つたからである。

さて、いよいよ此の家に変つて来た。すると、北に連つた壁が絶えず私の心を圧迫した。すると、私は病氣になつた。二ヶ月の間床にゐて、起き上がらうとすると、俄然として母が死んだ。と、次ぎには忽ち家人が病氣になり出した。（中略）

昨日私の友人の小児が死んだ。彼が新しく變つてからまだ二週間にもならないその家へ行つてみると、いきなり茶の間の壁から圧迫を感じた。私の家の壁と同じ圧迫感である。友人は門が北向きだからいけないのだと云ふ。が、私は此の壁だと云つた。変に心の眼前に絶えず突き立つてゐるやうな壁は呼吸器病を連れて来る。

新しい家を借りるときは、いつも壁を見るものだと私は思つ

てゐる。もし幾分の不満を忍耐して了つてゐると、いつの間にか、その一点の心の暗さが生活の中で尠大な翼を拡げて黙々と運命の上のさばつてゐるものである。

横光は家を契約したとき、既に違和感を覚えたが、そのまま放置した。この些細な違和感が、後に横光一家に不幸をもたらす。「感想と風景」においては、家族の病氣も、友人の凶事も、すべての不幸の原因は、家の構造にあるとされる。問題となる壁が、空氣の流通に干渉し、住人は呼吸器病を発症する。この肺病にかんする発想は、單なる横光の実体験ではなく、風と犯罪の關係と同じく、フェリーの影響を受けたものである。ここでは、フェリー『社会政策と近世科学』⁶⁾の一節を引用する。

凡そ疾病なるものは、その急性なると慢性なると、流行性なると否とを問はず、一に皆個人の體質と物理的社会的境遇の影響との所産ならざるはなく、唯々これ等各種の事情は、種々の疾病にありて、その強さを異にするのみ。例へば、肺に關する疾病は主として個人の體質に因りて生ずるも、四圍の境遇の影響も亦必しも等閑に附するを得ず。

フェリーは、疾病についても、個人の體質と周囲の環境の所産と見なす。そして、「肺に關する病氣」にも環境の影響を無視できないという。横光は、フェリーの思想に触れ、フェリーの肺病に対する認識を家族の病氣に投影して自身の境遇を理解したのではない。横光は、この思想を日本従来の「家相学」と融合させることによって、独自の認識を構築し始めたのである。

三、

「無常の風」の前半で、横光は、地形と意識の關連性を指摘し、個人が環境によつて支配されることを論じた。この法則は、個人の集合体である社会においても、当然通用するはずである。「無常の風」の後半では、この思考はさらに進み、天文・地文と社会の關係が論じられていく。

それはともかくとして無常の風は日本の地貌ではどのあたりから吹いて来る風かと考へると、もうここからは独断にならざるを得なくなる。とにかく乾燥した風だ。乾燥した風は窒素の加減で靈魂が放散し易いものらしい。塩分を含んだ風の中では人はさう容易く死ぬものではないと見える。それに乾燥した風は太陽のコロナと多大の關係を持つてゐる。コロナがまた太陽の黒点と著しい關係を持つてゐる。

横光は、ここで、「無常の風」を「乾燥した風」と表現する。「乾燥した風」では、靈魂が放散しやすく、塩分の多い風では人は死ににくくなるという。空氣の成分も人の運命にかかわるだけではない。横光は、「乾燥した風」を天上の太陽と關連付け、「太陽のコロナ」「太陽の黒点」に言及し、それらが人の生死にもかかわるとした。遙かなる宇宙にある自然現象が、如何にして地上の人命につながるのか。この現象を理解するため、フェリー『社会政策と近世科学』の一節を引用する。

凡そ百般の社会現象は、一として歴史的事情と四圍の境遇との必然的結果にあらざるはなし。近世交通機關發達の結果、渾円球上各地方相互の間における各種の關係愈々密接となり、一見何等の關係なきが如き遠距離に位する甲乙両地に於ても、そ

の実経済、政治、法律、倫理、美術、学芸等百般の現象において、互に極めて密接に関係するに至れり。而して、個人の財富集積と相続権とに対して何等の制限をも設けざる現時社会の財産制度と、人類の需要に応ずべく自然の給与せる材料に対して、学理的発明の結果を応用することの益々増加せると、蒸気電氣を使用せるが為に人類の労働の甚しく容易なるに至れると、移民の潮流の絶えず自由に移動するに至れるとは、農夫、工人、小商人等の生存をして、全世界の生存と離るべからざる緊密なる関係に立たしむるに至れり。斯くて、最も遠隔せる地方に於ける農産物及び製産品の豊凶盛衰も、凡ての文明国民に直接の影響を與ふること、恰もかの太陽面に於ける黒点の増減が、直ちに地球上の農業上定期的の恐慌を引起し、以て幾多生靈の運命に直接の影響を與ふるが如し。

フェリーによれば、すべての社会現象は、森羅万象と相互に関係しあつて成立しているものであつて、独立自存のものではない。太陽黒点の周期的現象は、人間社会に、農業の定期的恐慌として反映する。社会の変動は、自然の周期と一致するという理解である。横光が言う「私は小説を書く男であるが小説の中で人間の運命を發展さす場合、いつも此の風と光線とが気にかかる」の「光線」は、この社会変動にかかわる太陽黒点のことであつた。太陽黒点に触れて、横光の問題意識はもう一度地上に戻る。

私は社会主義の布疋される地域がまた此の風の密度によつて非常に相違して行くものとも思ふ。此の主義は風のやうに地貌とまた密接な関係を持つてゐる。地貌の運動作用、特に準平原の輪廻作用を思ふと私は社会主義者にならざるを得なくな

る。ボルシエビイキの現状を見てゐても伊太利及び日本、英國、独逸の社会現象を見てゐてもその作用は地質学の造山運動と殆ど異なる所がない。

横光は、社会主義と地質運動を結び付ける。その背景には、やはりフェリーの存在があつただろう。フェリーは犯罪学者でありながら、同時に政治家、社会主義者である。社会主義者フェリーの思想はマルクスの思想と根本的に対立する。フェリーは、『社会政策と近世科学』において、マルクスの根本思想を「経済現象は人類社会の全部一切の現象の基礎たり規定たるもの」と要約した。所謂「唯物史観」である。フェリーは、「唯物史観」に対して、次のように反駁している。

然れども、凡、各種の結果は単に一個の原因のみより生ずるものに非ずして、常に数多並存する原因の集積に成れるもの、而して斯て生ぜる結果は又転じて他の現象を誘起する原因となつてふ自然的因果律の一結果として、上述の法則により与へられたる形式の稍々偏狭に過ぐるを見、これを完成するが為には幾分の修正を加ふるの要あるを見るなり。恰も個人の心的現象は、その人の有機的規定なる氣質とその四圍の境遇との結果なるが如く、民族の道德、法律、政治等凡ての社会的現象は、その民族の有機的規定たる人種とその四圍の境遇との結果なり。蓋この両者が原因となりて、生活の物質的基礎たる一定の経済制度を決定するものなればなり。

「唯物史観」は、あらゆる社会現象を経済基礎に従うものと見なす理論である。しかし、フェリーはこれに反して、物事の結果には複数の原因が並存することを主張し、すべての事象が「自然的因果

律」の結果とする。それ故に、経済制度も周囲の自然環境の産物と見なすべきであるという。フェリーは、『社会政策と近世科学』において、この思想の背後に存在する原理について、次のように説明している。

スペンサーの創唱に成れる進化論は、その相對論（相對論とは万物一として恒久絶對なるはなく、必ずその時代と境遇とに応じて變遷するものなることを主張する學說を云ふ。後に歴史派これを繼承して法律學、經濟學の上に新研究を施したり）の大勢を社會學に應用して主張すらく、宇宙の森羅万象一として變遷推移を受けざるはなく、天文、地文、生物、人類、及び社會の諸學に屬する萬般の事物にありて、一切事物の現在の狀態は、絶えず幾千萬回の避くべからざる自然的變形を重ねたる結果を示せるものに過ぎず。是故に、現在の狀態が過去の状態と異なる如く、將來は又必ず現在と異なる狀態に出づべきなりと。進化論は斯の如く、スペンサーの建設せる所なりと雖も、而かもスペンサーの學說は唯々幾多の學理的證明を収集し、これを扶くるにヘーゲル、及びライプニッツの主張たる（一）現在は過去の産兒にして將來の母たり。（二）萬有は皆變遷して一も常住なるはなし、てふ）二個の抽象的思想を以てしたるものに外ならず。而してこの論証たる、業に既にライエル氏が地質學の研究に於て試みたる所にして、彼は従來久しく學者の論争点たりし地層の洪水激變說を排し、これに代ふるに、地層の漸進継続的變形てふ學理を以てせり。

フェリーの社會學の前提にあるのは、彼の犯罪學と同じく、自由意志の否定である。フェリーはスペンサーの學說を自說の補足とし

た。スペンサーは、社會を包括するあらゆる事象は、流轉の中にあるという。フェリーはこうした抽象的解釈に満足せず、さらに當時の主流である地質學者ライエルの「齊一說」の成果を引用し、地形の推移を以て、實証的に自然の變遷を説明している。

さて、横光は、社會主義と地質作用の關係を論証するにあたって、「準平原の輪廻作用」という表現を使った。「準平原の輪廻作用」とは、地質學「地形輪廻說」の術語である。横光文學における「地形輪廻說」の利用については、拙稿「静かなる羅列」論——「唯物史觀」の相對化としての「地形輪廻說」^①において論じた。「地形輪廻說」とは、一八九九年にアメリカの地理學者William Morris Davisが創唱した學說である。「地形輪廻說」によれば、地形は、地殼變動などの「內的營力」によつて作られる。地表に突出される地形は、河流・氷河・波浪・風力・風化などの太陽エネルギーの變形である。「外的營力」の削剥で、平坦化される。所謂「太陽の均平作用」である。地形が削剥され、再び隆起して再度平坦化されるような系統的變遷を、「地理學的輪廻」という。

「實証派犯罪學」には、「人類は天地創造の中心ではなくて、唯だ動物學的鎖の最後の環である、また自然は永遠的エネルギーを、賦与されて居て其に依つて動植物の生命を、鉱物の生命（結晶体に於てへ生命の法則は働ひて居る）と同様に、目に見えない様な微生物から、最高形態なる人類にまで化成したものである」という一節がある。横光は、このエネルギーの環に注目し、ライエルの「齊一說」より新たなデイビスの「地形輪廻說」を援用することで、地表に働く社會と人の運命を天地間のエネルギー循環という必然的現象の一環として統合させ、東洋の輪廻を解釈したのである。

横光の思想は、フェリーの社会学から、さらに発展したらしい。講演用草稿と見られる未発表原稿には、次の一節がある⁵⁶。

地型学の原論では地上に働く総ての営力は、総て太陽の均平作用に基くと云ふことが根底になつてゐるやうですが、實際われわれが想像してさへが、山が風雪のために削られてだんだんと低くなつて平原化して高低がなくなり、海が陸になつて海面から浮き上る陸造運動が行はれたりしながら、次第に、地球の表面が完全な球体を描いて行く。かう云ふ運動も総て、太陽を中心にして完全へ完全へと向つてゐる何かの意志であるかのやうに思はれてなりません。

さう云ふ意味からしても、東洋も西洋も、だんだん、一致して完全へ完全へと向つて進んでゐるにちがひないと感じられます。しかしながら、完全へ向つて進むには、山が風や雨や雪や雲のために削られて平面へ崩れなければならぬやうに、東洋と西洋とのどちらか高き方は崩れなければなりません。

例へば氏族の間に、これまでしばしば戦争と云ふものがあつて、血を流して来てをりますが、これなども、確かに、太陽の均平作用によるものに相違ないと思はれます。一つの戦争があるごとに、その国の男子が殺戮をしい、婦女子は奪はれ、勝つたものの氏族の血液は負けたものの氏族の中へ殺到して行く、と云ふやうな現象を見てゐても、確かに戦争と云ふものは、太陽の均平作用に属してゐる一つの、完全への到達としての努力であるかのやうに思はれます。

横光家が所蔵していた講演草稿の執筆年月は不明であるが、こゝで言及する「地形輪廻説」の思想と術語は、辻村太郎『地形学』（一

九二三年）⁵⁷によつて日本に紹介されたものであった。草稿本文には、次のような執筆時期を示唆する一文が確認される。

目下の支那を一寸頭に浮べても、わたくし達は、支那を侵略してゐる西洋諸国が賢いのか侵略されてゐる、支那そのものが馬鹿なのか、或ひは、西洋の列国が馬鹿を見てゐるのか、支那そのものが列国を馬鹿にしてゐるのか、一寸判断に苦しむ状態を示してゐます。

執筆当時の中国は、日本人横光から見れば、西洋諸国に侵略されてゐる状態にあつた。この草稿は、『地形学』刊行後（一九二三年）、満州事変勃発以前（一九三一年）のものとして推定される。

横光によれば、文明の終焉は、東洋と西洋を問わず、太陽の均平作用の一環として、必ず均平に収束されるものである。フェリーの思想は、あくまでも社会主義を弁護するための言説、社会論であつたが、横光は、フェリーの思想を踏襲せず、文明の本質を思考し、文明論に及んだ。「無常の風」は次の一文で閉じられる。

此の風と光線とエヂプト、アツシリア、ペルー、印度、支那の文化の発達とを関連させて考へて見た場合、誰とてひそかな私のこのあられもない独断の楽しみを嗤ひはすまい。

横光は、世界各地のあらゆる文明も、すべて自然の力で作られたものとする。個人の行動と運命は、周囲の環境によつて支配されている。個人の集合体である社会は、環境の支配から逃れられない。自然は、地形輪廻、太陽黒点などの周期的現象として現れる。文明は、自然の循環の一環として現れる。「無常の風」は、このような問題意識に基づいて書かれたエッセイである。

四、

では、「小説を書く男」である横光は、「無常の風」に示した思想を、小説の中にどのように反映させていったのだろうか。

フェリーの犯罪学を援用した横光の小説として、「碑文」(『新思潮』(第六次の二) 第一号、一九二三年七月)がある。拙稿「横光利一「碑文」論——『聖書』を相対化する語り」¹⁰⁾において論じたように、「碑文」は、聖書の世界をふまえた作品である。ヘルモン山上にあるガルタンの市民は、降り止まない雨の影響で、心身ともに劣化して行く。しかし、ガルタンの市民は、そうした異変が雨の影響であることを誰も意識せず、相互の罪悪の結果と確信し、全滅を迎える。

「碑文」において、雨の原因について論争が行われたとき、ある哲学者は「ガルタンがヘルモン山上に位置する」ことを挙げ、山勢による上昇気流がもたらした地形性降雨であることを指摘した。レバノンに実在するヘルモン山は、確かにその高さを以て、最も乾燥する地域に多量な降水をもたらし、ヨルダン川となって一帯を潤している。しかし、「碑文」の中でこの地理的観点が深められることはない。

ガルタンの市民は、雨の影響で、発狂、疾病、自殺、犯罪という順序を踏み、滅んでいく。『社会政策と近世科学』には、「疾病、犯罪、発狂、自殺等は、飢饉、恐慌の場合に於て著しく増加するも経済界の割合に順調なる年には大いに減少す」という一節が確認される。「碑文」には、フェリーの社会学も吸収されていると思われる。

「碑文」は、ガルタン滅落の過程で、「ガルタンの殺戮は次第にそ

の勢ひを弱めていった。が、それにひきかへ、市民の肉体は日に日に激しい性の衝動を高め始めると、終にガルタンの城市はヘルモン山の山上で、声を潜めた一大売淫所と變つて来た」という災難中の性衝動を描く。災害による性衝動の亢進も、フェリーに由来するものである。ここでは、フェリー「大震後の風俗壊乱と女子の心理」¹¹⁾を全文引用する。

先年イタリア国メシナ大震の際、生存せる人々は、激烈なる打撃を蒙りし結果として、無感情の状態に陥り、四圍沈静に帰したる後は、呼声を発し又は嘆声を漏すことすら敢てする能はず、一面に於ては、野獸的主義の本能は旧に倍し、多数は概ね女子と合意の上姦淫を恣にせり、然れば、死者三万に及びしに當り、更に多数の生児を生ずべき奇観を呈せり、感情の激動を経且大危険を免れたる女子は服従し易きものなることは確實なり、即ち感情激動後に於ては、禁止觀念多少一時的に消滅し、殊に意志に至りては甚しく障礙せられ、通常深く潜在せる情欲の發露を來すに至る、前述メシナ大震後の際に於ても、女子の道德力及体力共に羸弱となりし結果、容易に男子の言に従ひたるものにして、或者にありては、多数男子と同じく、性慾非常に興奮せられたるものある可し、斯の如きは要するに主として往々極めて弛緩なり易き禁止觀念の消失に基くものにして、革命、攻戰の際等にも觀る所の現象なり、斯る際にありては、一面戰闘欲は、流血等の為め、男子の性慾旺盛なるに反し、恐怖等の為め女子の意思力薄弱となる、彼の情死前に於ける交際中の一部のものは此種類に属す又或事件に關し激怒せる少女は、極めて誘惑し易く、為に誘惑者は此性質を利用し之が誘惑を企

つるものあり。

フェリーは、イタリヤのメシナ大震後の人間を観察し、震後の性慾という点に注目した。性慾の興奮も、禁止觀念の消失も、地震の影響で「通常深く潜在せる情欲」が発し、「野獸的主義の本能」があらわにされてしまった結果という理解である。「碑文」に描かれるところの性衝動も、おそらく、フェリーの学説を反映させたものであつたのだろう。

「碑文」という実証派犯罪学を投影した世界の中で、市民たちは因循な古典派犯罪学に属していると言える。横光は「ノアの方舟」を下敷として使用し、全滅という原作と異なる結末をあえて選んだ。それは、勸善懲惡の觀念を標榜するキリスト教に対する批判であらう。

五、

家相学を用いて書かれた小説として、「美しい家」(『東京日日新聞』、一九二七年一月)がある。「感想と風景」が発表された七ヶ月後、横光の妻も死ぬ。横光は、家相学の思想と自身の経験を交えつつ小説化し、翌年一月に「美しい家」を発表した。

ある日、私は妻と二人で郊外へ家を見付けに出て行つた。同じ見付けるからには、まだ一度も行つたことのない方面が良いといふ相談になつた。

私達はその日一日歩き廻つた。夕方には、自分達の歩いてゐる所は一体どこなのだらうと思ふほどもう三半器官が疲れてゐた。(中略)

(こゝで、私と妻とが同じやうに疲れたといふことが、私達一家の間に、大きな悲劇をもたらした原因であつた。)(中略)

疲れてはいけない。疲れると判断力がなくなるものだ。私達は疲れた心でまた家を探しに出かけていつた。(中略)

その家へ越して来たのは、それから一週間もしてからだつた。私はその家が自分の家になつてから、初めて良く家の中を見廻した。すると、私は急に、「いやだ。」と思つた。どうしてこの明るい家の中に、こんな暗さがあるのだらうと考へた。北側に一連の壁があるこれだ。——しかし、私は間もなく周囲の庭に咲き乱れてゐるとりどりの花の色に迷ひ出した。外の色が、内の暗さを征服した。私は北に連らなる頑固な壁を知らずしらすの間に頭の中から忘れ出した。

だが、秋が深くなると、薔薇が散つた。菊が枯れた。さうして、枯葉の積つた間から、漸く淋しげな山茶花がのぞき出すと、北に連らなつた一連の暗い壁が、俄然として勢力をもたげ出した。私はかぜを引き続けた。母が、「アツ」といつたたまゝ、死んでしまつた。すると、妻が母に代つて床についた。私の誇つてゐた門から登る花の小路は、氷を買ひに走る道となつた。

「美しい家」の筋は「感想と風景」と一致し、かつ、その思想は「無常の風」以来の「家相学」の延長線上にある。小説の冒頭において、この家を選択する理由が示される。家探しする新婚夫婦は、一日中歩き廻つたことよつて、「三半器官」が疲れ、「判断力」もおち、構造に問題がある家を選択してしまふ。「三半器官」の疲労は、フェリーの言う「人類学的因素」と対応する。「美しい家」では、「三半器官」のような具体的な器官が氣流と神経に代わり、外部と

内面の媒体となる。

「恐ろしき花」という戯曲も家相学的作品である。一九二五年七月から一九二六年六月にかけて『新小説』『文藝春秋』に連載された「恐ろしき花」は、淫蕩な一族を題材とする物語である。一幕「恐ろしき花」（『新小説』第三十巻第七号、一九二五年七月）の冒頭において、主人公Aは、友人Bに対して、「家相」という言葉を使いつつ、自宅の「鬼門」について話し、「さう云ふ所から、その家には罪悪が生れて行く」と述べている。自分の妹への求愛に対して、Aは自宅の「物置小屋」を持ち出し、Bの求愛を拒絶する。

A。君、あそこに物置があるだらう。（物置小屋を指差す。）例へば僕の家の屋敷の中の、ああ云ふ所に一つの物置小屋があるとするとね、あそこは一番人眼にかからない所だ。僕の家の人達はあの小屋に関する言葉を誰も云はない。殆どあの小屋の存在さへ知らないと云つた形だ。所が、僕の家の人達で人心のついてゐる者は、誰でもあの小屋を一番重大に考へてゐるにちがひないんだ。誰も一口もあの小屋について云はないだけ、それだけ、家人にとつては重大なんだからね。皆夫々自分だけにとつては大切な所だと感じてゐるんだ。だから、自分以外の者は皆あの小屋を忘れてゐると思つてゐる。所が、誰も彼もがさう密かに思つてゐるんだから、奇怪千万な小屋なんだ。僕の家が殆ど代代あの小屋を中心にして動いて来たやうなものなんだ。僕の家にとつては、あの小屋は所謂例外と云ふ奴だ。僕の家そのものも例外的なものだが、あの小屋はそのまた例外と云ふ奴だ。

B。君はまた僕を脅かさうとしてゐる。

A。いや、僕は僕の家を話しておかうと思つてゐるだけさ。僕の家が代代の淫蕩さは遺傳的だ。僕だつて、妹だつて、あの小屋の中で生れた破目になつたにちがひないんだ。実際、君、遺傳の中で淫蕩な遺傳ほど猖獗を極める奴はないからね。

妹への求愛に対して、Aは自宅の「物置小屋」の存在を紹介し、「僕の家が殆ど代代あの小屋を中心にして動いて来た」とし、一族の淫蕩な性質もこの小屋に由来するものと解釈している。所謂「家相」の認知である。「美しい家」「恐ろしき花」は、家相学にフェリーの犯罪学を加味して成り立っているのである。

六、

フェリーの社会学を利用する作品として、「静かなる羅列」（『文藝春秋』第三年第七号、一九二五年七月）と「街へ出るトンネル」（『中央公論』第四十一巻第七号、一九二六年七月）が挙げられる。拙稿「静かなる羅列」論——「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」¹²で論じたように、「静かなる羅列」において、S Q川流域に発祥する文明は、相克する二川に支配される。社会の盛衰興亡は、川の勢力の消長と軌を一にする。小説の終盤における戦争による文明の壊滅は、「地理学的輪廻」の必然的運命である。この解説は、前引横光未発表原稿の内容とも一致する。

「街へ出るトンネル」の主人公は、トンネル工事を請け負う資産家の息子計介である。小説冒頭で、トロツコ墜落事故の起きたことが示唆されるが、工事現場の犠牲について、「簡単に社会学の抽斗

を開けて見る気はしな」計介は、犠牲になった坑夫を「計介一家の利益を上げる過程への犠牲」とは認めない。「峡谷の河口で発展する港が悪い」と思い込み、自分一家も「港の発展に与へられてゐる一つの犠牲」と信じている。計介は、工事現場の紛争を、トンネルの「成長する養分」ととらえ、街まで延びるトンネルを、街の需要が作った怪物と想像する。

——しかし、それがどうしたんだ。

計介はいつものまにか雨に濡れて桶のやうにびしょびしょになつてゐた。彼は学生時代に習つた地形学の原論をふと思ひ出して呟いた。

——地表に働く営力の最後の目的は、総て、太陽の均平作用である。

計介は、工事現場の事故と紛争を、人間社会という大きな活動の一部と理解している。労使対立を作品のモチーフとしつつ、階級闘争に帰着させず、社会の背後にある自然を意識させ、「地形輪廻説」の知識を持ち出して、社会活動を「太陽の均平作用」による自然周期の一環として統合する。ここに示されているのは、人間社会の紛争を、自然の不可抗的現象とみなす思想である。

「碑文」では、地形性降雨が人間社会を滅ぼす様が描かれる。「静かなる羅列」においては、川を主人公として、自然輪廻の一環としての人間社会が表現される。「街へ出るトンネル」で、横光は、さらにこの発想を発展させ、個人の生活の視点から出発して、自然周期を描くことに挑戦する。個人生活と自然秩序の交錯は、「街へ出るトンネル」以降の横光文学の底流として流れていくのである。

七、

「無常の風」とは、自由意志を持たない人間には、自然の周期性を避けることできないという現象の比喩である。フェリーは、人と社会を独立的存在とせず、その上位概念として自然の存在を意識した。それだけではなく、フェリーは、自然を崇拜の対象として認めず、その背後に存在するメカニズムをきわめ、自然という概念を超越しようとしている。自然の存在は、地形という物理的現象を通じて具体化されるものである。

環境に支配される意志、自然に支配される社会、この二つの思想の土台になるのは、自由意志の否定である。横光は、フェリーの犯罪学を吸収した上で、家相学を解釈した。さらにフェリーの社会学と最新の地質学「地形輪廻説」を融合することで、人の存在を天地一体として統合させ、輪廻を解釈した。横光は、東洋の思想と西洋の理論を融合させ、独自の文学世界を構成したのである。

「無常の風」前後、横光は、フェリーの思想を利用し、複数の作品を著している。フェリーの思想を作品に投影するだけではなく、フェリーの著作内容をそのまま小説の種本として使う傾向も認められる。「碑文」「美しい家」「恐ろしき花」は、フェリーの犯罪学の影響下で形成された作品である。「美しい家」のモチーフとなった横光の実体験は、病妻小説群に発展する。フェリーの社会学の影響下で書かれた「静かなる羅列」「街へ出るトンネル」は、横光の文論につながる。

このように形成された横光の思想は、病妻小説群、心理小説群、純粋小説論を経て、日本文明の本質を求める思索にもつながってゆ

く。これらの点については、稿を改めて論じることにはしたくない。本稿は、横光文学の前提として、「無常の風」を読み解く試みである。

注

(1) 「無常の風」の初出本文と単行本文の間には、異同が複数

確認されるが、意味がほぼ一致するため、ここでは問題視しない。『書方草紙』所収本文の末尾には「大正十三年六月（一九二四年六月）の年記があるが、横光の母が死去したのは大正十四年（一九二五年）一月のことである。従って『書方草紙』の年記を「無常の風」攔筆時期と見なすことはできない。また、『文藝春秋』掲載本文は適宜改行されているが、『書方草紙』には改行がない。改行しないことは横光文学の一特徴として知られている。これらの点については、稿を改めて論じたい。

(2) 『日本国語大辞典』第二版は、「無常の風」について、「風が花を散らすところから、人の命を奪うこの世の無常を風にたとえていったもの。無常風」とし、大智度論「咄世間無常如^二水月芭蕉^一 功德滿^二三界^一 無常風所壞」を出典とする。『保元物語』「無常のあらしをいかでかのがれさせ給ふべき」という用例のように、日本文学の中でも、この世の無常の比喩として広く用いられている。

(3) フェリーの事績については、エンリコ・フェリー『実証派犯罪学』（浅野研真訳、文精社、一九二六）、大谷實『刑事政策講義』（弘文堂、一九八七）、『20世紀西洋人名事典』（日外アソシエーツ、一九九五）、瀬川晃『犯罪学』（成文堂、一九九

八）を参照。

(4) 以下、「実証派犯罪学」の引用は、浅野研真訳「フェリー氏実証派犯罪学」（『日本法政新誌』、一九二四・五（十二）による。ただし、後述するように、横光は同論を邦訳以外のテキストで読んでいたと思われる。

(5) 「無常の風」発表当時、Enrico Ferriの邦訳表記は、「フェリー」、「フェリオ」、「フェリ」、「フェルリ」など、複数存在しているが、横光が使う「フェリオ」という表記は、横光独自の表現である。

(6) エンリコ・フェリー『社会政策と近世科学』（樋口秀雄編、金港堂、一九〇九）による。『社会政策と近世科学』前篇「社会主義と近世科学」は、フェリーが一八九四年に発表した *Socialismo e scienza positiva* (Darwin, Spencer, Marx) の邦訳である。樋口秀雄訳は、南木性海の英訳に準拠した訳稿を底本として、仏訳を参照しつつ、改訳されたものという。

Socialismo e scienza positiva (Darwin, Spencer, Marx) には、「無常の風」発表以前、『実証科学と社会主義』（丸山嘉八郎訳、日本図書出版株式会社、一九二一）、『近世科学と社会主義』（蔭田三郎訳、大鏡閣、一九二三）の二邦訳が別に存在する。ただし、「無常の風」の「ボルシエビイキの現状を見てゐても伊太利及び日本、英国、独逸の社会現象を見てゐてもその作用は地質学の造山運動と殆ど異なる所がない」という一文は、樋口秀雄編『社会政策と近世科学』後編第四章「現代社会主義の分布」の内容とよく符合する。横光が参照したのは、『社会政策と近世科学』と推測される。

- (7) 英荘園「静かなる羅列」論——「唯物史観」の相対化としての「地形輪廻説」(『横光利一研究』第十九号、二〇二二・三)
- (8) 『定本横光利一全集 第十六巻』(河出書房新社、一九八七) 四八七頁―四九三頁
- (9) 辻村太郎『地形学』(古今書院、一九二二)
- (10) 英荘園「横光利一」碑文」論——『聖書』を相対化する語り(『山口国文』第四十四号、二〇二一・三)
- (11) フェリー「大震後の風俗壊乱と女子の心理」(『新公論』第二十六巻第七号、一九一一・七)
- (12) 注(7)に同じ。

付記

本稿中に引用した横光の文章は、すべて河出書房新社版『定本横光利一全集』に拠った。ただし、仮名遣は原文のままとし、旧漢字は新体字に改めた。他の引用においても同じ方針をとった。

本稿は、山口大学人文学部国語国文学会第四十六回研究発表会における口頭発表にもとづく。席上ご質問くださいました中元さおり先生に感謝いたします。

(えい・そうえん)